ウジェーヌ・ポティエ　（その死去二十五周年によせて）

昨 1912 年 11 月は、フランスの労働者詩人ウジェーヌ・ポティエが死去してから 25 年にあたっていた。彼は有名なプロレタリア歌『インタナショナル』（『起てうえたる者よ』……）の作詞者であった。

この歌はヨーロッパのすべての言葉――いや、ヨーロッパの言葉だけではない――に翻訳されている。自覚した労働者がどの国にやってこようと、運命が彼をどこにつれていこうと、祖国から遠くはなれて、言葉も通ぜず、知合いもなく自分をどんなに他国人だと感じていようと、彼は『インタナショナル』の熟知した旋律によって、自分の同志と友とを見つけることができるであろう。

万国の労働者は自分たちの先進的な闘士、プロレタリア詩人のつくった歌をうたいついで、この歌を世界的なプロレタリアの歌にした。

万国の労働者はいまウジェーヌ・ポティエに敬意を表している。彼の妻と娘はまだ生きていて、『インタナショナル』の作詞者が生涯そうであったように、貧しい生活をしている。彼は 1816 年 10 月 4 日パリに生まれた。彼が最初の歌をつくったのは、14 歳の時であった、そしてこの歌は『自由万歳！』というのであった。1848 年には、彼は労働者とブルジョアジーとの大戦闘に、バリケードの戦士として参加した。

ポティエは貧しい家庭に生まれ、生涯貧乏人、プロレタリアとして生活し、箱の荷造りをしたり、のちには織物に図案をかいたりしてパンをえていた。

1840 年以来、彼はフランスの生活のすべての大事件に自分の戦闘的な歌で反響をしめし、おくれた人々の意識を目ざめさせ、労働者に統一を呼びかけ、フランスのブルジョアジーとブルジョア政府をむちうった。

偉大なパリ・コンミューンのときには（1871 年）、ポティエはコンミューンの議員に選出された。3600 票のうち、3352 票が彼に投じられた。彼は、最初のプロレタリア政府であるコンミューンのすべての施策に参加した。

コンミューンが没落したので、ポティエはイギリスとアメリカに亡命せざるをえなかった。有名な『インタナショナル』は、1871年6月に、血なまぐさい五月敗北のいわば翌日に言かれたものである。……

コンミューンは鎮圧された……だが、ポティエの『インタナショナル』はコンミューンの思想を全世界にひろめた、そしていまこの思想は、いつにもまして生きいきとしている。

1876 年、亡命中にポティエは『アメリカの労働者はフランスの労働者に訴える』という詩を書いた。彼はこの詩のなかで資本主義のくびきのもとにある労働者の生活、その貧困、その苦役労働、その搾取、その事業のきたるべき勝利にたいする彼らの固い信念をえがきだした。

コンミューンから 9 年たってやっとポティエはフランスにかえり、ただちに「労働党」にはいった。1884 年に、彼の詩の第一巻が出版された。1887 年には、第二巻が『革命の歌』という標題で出版された。

この労働者詩人の他の多くの歌は、その死後にはじめて発表された。

1887 年 11 月 8 日、パリの労働者は、ウジェーヌ・ポティエの遺骸を、射殺されたコン

ミューン戦士が埋葬されているペール・ラシェーズ墓地に埋葬した。警察は大乱闘をはじめ、赤旗をひきさいた。大群衆が市民葬に参加した。四方八方から、「ポティエ万歳！」という喚声があがった。

ポティエは貧困のうちに死去した、だが彼は自分について真の不朽の記念碑をのこした、彼は**歌による最大の宣伝家**の一人であった。彼が最初に歌をつくったときには、社会主義的労働者の数は、たかだか数十をもってかぞえられた。しかし、いまでは何千万というプロレタリアがウジェーヌ・ポティエの歴史的な歌を知っているのである。

注）……は本文中の略　　第 18 巻 P666~668『ウジェーヌ・ポティエ』

『プラウダ』第 2（第 206）号、1913 年 1 月 3 日